

「距離以上に近く感じる外国」大阪に人気集中

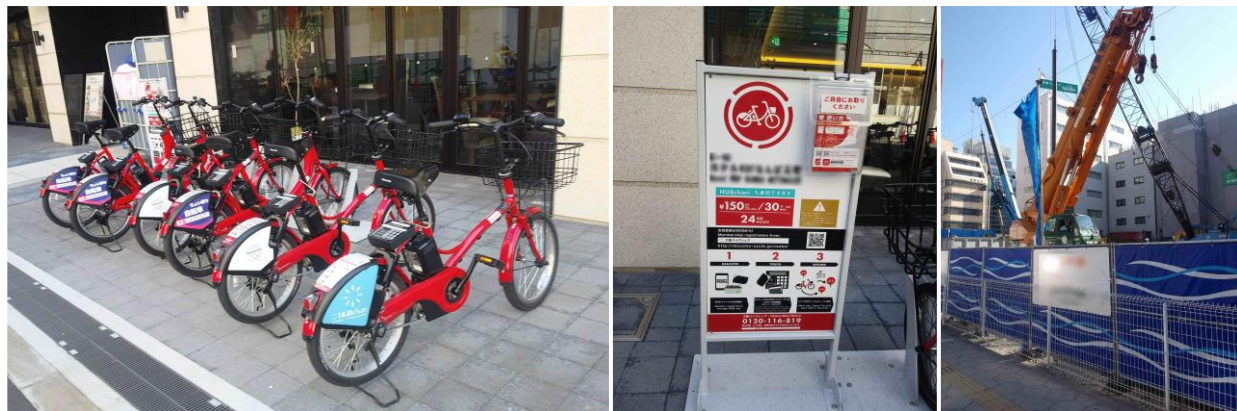
大阪・ミナミの百貨店や大型ディスカウント店、黒門市場や戎橋、心齋橋筋などの商店街に足を踏み入れると、ぶつからずに歩くのが困難なほど外国人観光客であふれている。その多くは東・東南アジア系の人々だ。観光庁の『平成30年版観光白書』と大阪府観光統計調査によると、2017年の訪日外国人旅行者数は約2,869万人に達し、そのうちの38.7%、約1,110万人が大阪府を訪れたとみられる。国別の来阪外国人観光客数は、1位が中国（香港を除く）で約402万人、2位が韓国で約241万人、3位が台湾で約140万人、4位が香港約74万人、5位が米国約36万人となっている。1位～4位の東アジアの国々だけで約858万人で来阪外国人の77.3%を占める。

大阪で最も外国人観光客を集めているのが、難波、心齋橋、道頓堀を中心とした大阪・ミナミエリアだ。関西空港からは南海電鉄なら直通で難波駅へ、JR西日本でも1度の乗り換えでJR難波駅に到着する。難波駅から一歩足を踏み出すと大阪ミナミの繁華街だ。アジアからの留学生に「大阪の魅力」について聞くと、大阪は『距離以上に近く感じる外国』なのだと言う。アジアの国々ならどこにでもあるような屋台の飲食街、雑多な品々が販売されているマーケットや市場……。そんな一見、猥雑とも思える雰囲気スポットが、大阪の繁華街のあちこちに存在する。そんな街の空気がアジアの人々には心地良く感じるようだ。さらに「大阪のおばちゃん」に代表される「おせっかい」な「おもてなし」が外国人観光客の琴線に触れる。街角で地図やスマホを眺め、行き先を見定めていると、おばちゃんが外国語など話しもできないのに「どこ探してんの」と果敢に話しかけてくる。言葉では説明できず、ついには「付いておいで」。

大阪ならではの民間主導のサービスも外国人観光客のニーズに応える。産経新聞大阪本社がある大阪市浪速区やお隣の西成区といったこれまでホテル立地に適するとは思われていなかったエリアに外国人向けホテルの建設ラッシュが起こっている。いずれも「オープンすればすぐに100%近い稼働率になる」という。また、大阪エリア内は各スポット間の距離が近く、自転車での移動が可能。というわけで、バイクシェアサービスが拡大。自転車の借り受け返却スポットのポートを増やしている。外国人観光客をターゲットにするホテル前がポートとなっているところもあり、今後、さらに利用者が増えていくだろう。

今年のG20大阪サミット、ラグビーワールドカップ、来年の東京五輪、再来年のワールドマスターズゲームズ2021関西、2024年にも開業が予定されるIR・カジノ、そして2025年の大阪・関西万博開催に対応して、鉄道や道路など官主導のインフラ整備も進むはずだ。民間の知恵を生かしながら、大阪らしさを失わない観光都市造りをどう進めていくのか、注目したい。

産経新聞社大阪本社 メディア営業局 企画開発部部长



- 写真左：各スポット間の距離が近い大阪ではバイクシェアサービスが拡大中
- 写真中央：ホテル前にも、自転車の借り受け返却スポットの設置が進む
- 写真右：浪速区や西成区では、外国人向けホテルの建設ラッシュが続く